

# 激変した湿地の魚と水鳥たち

## — 大崎耕土の昔と今 —

大崎市産業経済部世界農業遺産推進課  
非営利活動法人シナイモツゴ郷の会

三宅 源行  
三浦 仁一

### 1. 大崎耕土の概要

大崎耕土とは、宮城県の北部に位置し、大崎市、色麻町、加美町、涌谷町、美里町の1市4町で構成される農地面積約360km<sup>2</sup>を有する地域である。

この地域の東側には比較的まとまった耕地があるが、これは鳴瀬川、北上川水系の末端部にある沖積低地で、その昔は河川の氾濫原で湿地も多かった。

東部地域特（下流域）の地形勾配は2,500分の1程度と緩やかであるため、現在でも大規模な浸水が生じやすく、品井沼、蕪栗沼のほか名鰯沼などに遊水地を設けて他の水田や集落への浸水被害の軽減を図ることとしているが、この「巧みな水管理」なども認められ2017年に世界農業遺産に認定されている。

図1 明治・大正期の大崎耕土



資料：富樫・加藤、1994

### 2. 品井沼と蕪栗沼

地域でも大規模だったのは品井沼と蕪栗沼である。

#### (1) 品井沼

品井沼は、吉田川が鳴瀬川と合流する直前にあった沼であったことから、鳴瀬川が増水すると吉田川を逆流した水が沼に滞留し、低い水田では3年に1作位しか獲れないとも言われていた。

水が出ると、男たちは農作業を止めて魚捕りに出かけ、他仕事以上の収入を得ていたそうであるが、その後の河川整備で鳴瀬川から分離され直接海に流れ込むようになった。今では沼そのものが無くなっている。

図2 河川整備前の河川



図3 河川整備後の河川



出典：図2、3とも北上川河川工事事務所資料に加工

(2) 燕栗沼

江戸時代の初め頃まで北上川支流の迫川が沼周辺まで流れており、勾配が緩いこともあって付近一帯は湿地状態であったが、北上川の流路変更やその後の支流の整備等により現在の姿になってきている。

3. 品井沼の魚 昔と今

品井沼は南北 3km、東西 6km、水深 1~2mの沼で明治第まで茂庭氏の領地で禁猟漁地であったことから、コイ、ウナギ、ナマズ等の魚類のほか、野鳥の生息地であり渡り鳥の休息地にもなっていたことから、1シーズンに10余万羽の鴨を捕ったとも伝えられている。

それぞれのデータの年次が揃わないので飛び飛びであるが、明治23年には漁業戸数は約150戸で漁業者は専兼合わせて215人、舟の数は約200隻、漁獲高も960円程になっている。

しかし、舟数と漁獲高だけで見ると、明治末期にはそれぞれが確実に減少している。明治末には品井沼干拓による水田化が進み、それにつれて漁業規模が大きく縮小した。

品井沼を含む仙台平野等の池沼で実施した魚類調査に基づいたOkada・Ikeda(1938)の研究報告によると、1930年前後の平野部の池沼ではコイ、フナ、ド

表1 漁業関係諸表

年次	戸数	専業	兼業	舟数	漁獲高
M23	148	15	200	197	959円
M25	130	20	160	175	691
M27	128	20	160	153	463
M31				148	550
M41				50	417

資料：町史わが鹿島台、鹿島台町史

ジョウ、ナマズ、メダカ、ウナギなど 17 種が確認されている。現在の旧品井沼では当時の半数以下の 7 種のみが生息しているだけである。しかし、旧品井沼周辺の里山のため池では、それまで絶滅したと思われていたシナイモツゴが 1993 年に 60 年振りに発見される等、近年、品井沼に由来する多くの魚が生息していることがわかった。里山のため池と周辺河川における在来の魚類の確認数は 15 種となっている。

明治時代の品井沼は、漁業者 220 人、舟 200 隻を有する県内でも有数の内水面漁業が盛んな土地であった。漁獲高から現在の金額に換算しても相当のものだったが、現在は趣味の魚釣り程度で、舟を見るのは洪水時のみで昔の姿は見る由もない。

蕪栗沼も一時は干拓が進められたが、その後の洪水対策の見直しで一部の沼が復活したことと、それに伴って増加した渡り鳥と農業が共生できる各種の取組により、今では年間の飛来数が 10 万羽を超える野鳥の楽園となっている。

#### 4. 蕪栗沼に飛来する渡り鳥「マガン」について

大崎市東部に位置する蕪栗沼（164ha）には、近年約多くのマガンが越冬のために飛来している。かつて 1995 年には数千羽程度の飛来数であったものが、2000 年には 4 万羽を超えるまでに増加し、近年は約 10 万羽を超えるまでに増加した。

マガンを含むガン類は、夜間は沼で就埒し、早朝に周辺の水田へと飛び立ち、日中は水田で落ちもみや草などを食べて過ごす。ねぐらとしている、蕪栗沼や化女沼から約 10～20km 離れた水田まで移動し、採餌する姿が観察されている。マガンは市のマスコットキャラクター「パタ崎さん」のモチーフとなったり、「市の鳥」に指定されたりなど、市民にとって身近な存在となってきた。

大崎市は「渡り鳥に選ばれたまち」として、多様な生きものと共生する地域づくりにつなげていきたいと考えている。